

聖書:ルカの福音書12章13~34節

説教:御国を求めなさい

はじめに

毎年この時期になると思い出すことがあります。二十二年前の四月一日、私たち家族は神学校で学ぶために東京のはずれにある羽村市に向かい、その日に到着するはずの引っ越し荷物を待っていました。ところが引っ越し会社の人に来てこう言ったのです。「有珠山噴火でJRが止まってしまい、荷物はまだ札幌にある。いつ荷物が届くかわからない。」目の前が真っ暗になるとはこのことで、それからが大変でした。日が暮れる前に電器屋では照明を、スーパーでは食糧を買いに走った。寝る布団は神学校の仲間や先生方から貸してもらい、荷物が届くまでの十日間、着の身着のまま過ごしました。人間切羽詰まったときに真っ先に考えるのは、食べること、着ることでした。今日のテーマそのものです。ところがイエスはこう言われる。22節。「何を食べようかと、いのちのことで心配したり、何を着ようかと、からだのことで心配したりするのはやめなさい。」けれども、お腹が空いたら何を食べようかと考えるのはあたりまえのことだし、熱があれば病院に行つて診てもらふのは当然のことです。それを「心配してはいけません」と言われたら、いったいどうしたらよいのでしょうか。イエスは何を言おうとしているのか、ともに考えてまいります。

1 人のいのちはどこにあるのか

1) ある金持ちのたとえ

このことを説明するためにイエスは一つのたとえ話をします。あるひとりの金持ちが持っている畑が豊作になり、今までの倉は手狭でしまいきれない。そこで新しく倉を建て直して蓄えることにし、さあこからは食べて、飲んで、楽しもうと思った矢先、この人のいのちは取り去られてしまいます。そして締めくくりが21節。「自分のために蓄えても、神に対して富まない者はこのとおりです。」

これと似たような話を、現実聞くことができます。そうならないよう、あなたは神に対して富む者、すなわち天に宝を積む者となつて、いのちのことを心配しないようにと警告します。

2) 神は良くしてくださる

そのいのちを心配しないものの代表例としてイエスは二つの生き物を取り上げます。24節。「鳥の

ことをよく考えなさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。それでも、神は養つていてくださいます。」そして27節。「草花がどのようにして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。」

鳥や草や花よりもあなたがたは価値があるのだと言われ、神はどんなに良くしてくださることでしょう」と言われると、嬉しくはなります。しかし手放しでは喜ばません。私たちは食べるのに困らないよう一生懸命働いて苦勞しています。神が私たちに良くしてくださると言われても、ほんとうだろうかと疑いたくなります。それとも、イエスは手の届かない高い理想を言っているのでしょうか。

3) 自分のいのちを延ばすこと

もう一つわからないことがあつて、それは25、26節です。「あなたがたのうちだれが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるのでしょうか。こんな小さなことさえできないのなら、なぜほかのことまで心配するのですか。」

だれでもできるだけ長く元気で健康でいたいと願います。それでジムに通つて運動したり、食事に気をつけたりと涙ぐましい努力をする。確かにいのちを延ばすことは簡単ではないにしても、私たちの関心のかなり大きな部分を占めていると言ってもよいでしょう。ところがイエスにとっていのちを延ばそうとすることは、ほんとお小さなことに過ぎないというのです。読み違いしたかと思うほど、戸惑つてしまいます。

4) 御国を求めなさい

ではどうしたらよいのかと言えば、その答えが31節です。「むしろ、あなたがたは御国を求めなさい。そうすれば、これらのものはそれに加えて与えられます。」

クリスチャンであれば、これまで何度も聞いてきた有名なみことばでしょう。何度も聞いていたので意味がわかっているのか、といえはそうとは限りません。例えばこういうことでしょうか。働くのをやめて、毎日熱心に御国を与えてくださいと祈り続けなさい。そうしたら自動的に食べるもの、着るものが与えられる、ということなのか。それもどうも違う気がします。

2 宝と私たちの心

1) 地上にある

今日の話は、ある一人の人がイエスに、遺産を私と分けるように私の兄弟に言って欲しいと願ったことから始まりました。そして33、34節で、「天に、宝を積みなさい。あなたがたの宝のあるところ、そこにあなたがたの心もあるのです」で閉じられる。そのような流れになっています。遺産を分けるようにと願った人の心は、その遺産に向けられており、それを自分のものにしようというのですから、地に宝を積もうとしたということでしょう。

2) 天に宝を積む

これに対してイエスは、あなたがたは天に宝を積みなさい。天の御国を求めて、そこに心を向けなさいと語ります。しかし、ここで困ったことがいくつかあります。天に宝を積もうとしても、天の銀行には地上の銀行のような預金通帳というものが無いのです。天に宝を積んだつもりでも、本当に天の銀行にきちんと振り込まれているのか、その証拠を見ることができない。今は詐欺とか、なりすましとかが多い時代ですからますます不安になります。それに加えて、どうしたら天の銀行に振り込みができて宝を積むことができるか、その具体的な方法がいまひとつわからなくて、悩む方も多い。

そしてもう一つの問題であり、皆さんが知りたいと思っていることでもあります。天に宝を積むこと、それは御国を求めることでもあります。そうしたら食べるもの、着るものがすべて与えられるとはどういうことなのか。その疑問にまた戻ってくるわけです。

3 信仰の先輩たちに倣う

1) アブラハムの生涯

これを考える糸口は、28節の最後にある「信仰の薄い人たちよ」にあるように思います。「御国を求めなさい」とだけ言われても、具体的にどうすればよいのかわかりませんでした。実は信仰と深く関係しているらしい。そこから掘り下げることができます。

具体的に考えるのがわかりやすいので、ここではアブラハムのことを取り上げてみます。アブラハムの信仰については、ヘブル書11章8節、10節にこう書かれています。「信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに

行くのかを知らずに出て行きました。」「堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都の設計者、また建設者は神です。」

アブラハムがカナンの地に移り住む決心をしたのは、彼が天の御国にあこがれていたからでした。一人息子のイサクをささげなさいと言われたとき、それに従うことができたのも、彼が天の御国のいのちを信じていたからでした。このように聖書においてアブラハムの信仰は非常に高く評価されていて、彼こそ「御国を求めた」信仰者の代表と言ってよいでしょう。

そんな人でしたから、いのちのこと、食べること、からだのことで何の心配もすることもなかったのか。そんなことはありません。神の声に従ってカナンの地に移り住むだけでも大変ことでしたが、カナンに来てからも、そこではよそ者に過ぎず、自分の土地などありません。それで家畜が飲む井戸水のことでは苦勞が絶えません。しょっちゅう地元の人たちと水のことを巡っていさかいが起きた。家畜のことだけではありません。あるとき甥のロトとその家族が誘拐されたときは、その救出のためにいのちをかけて敵と戦って、ロトを救い出した。アブラハムは苦勞人と言っているほどです。

ではその苦勞に見合うようなものを彼はいただくことができたのか。当時、血のつながった子どもが多ければ多いほど、神からの恵みを沢山いただいた人という考え方がありました。けれども妻のサラとの間に生まれたのはイサクただ一人でした。では土地はどうだったか。カナンをあなたとあなたの子孫の所有として与えると言われていながら、自分の土地として所有できたのは、妻のサラを葬ったマクペラのお墓だけでした。

2) イエス・キリストを通して御国に入る

もしアブラハムが地に宝を積むことを望んでいたのなら、まったくむなしい人生を送ったことになります。しかし彼は常に天の御国にあこがれ、自分の故郷に帰ることを信じて地上の生涯を歩んでいきます。そうして彼が手にした宝は、堅い基礎の上に建てられた神の国でした。永遠に朽ちないいのちの御国です。

ではいったいどのようにして御国に入ることができたのか。ただ、願ったからですか。ただ、求めたからですか。そうではない、御国には誰もが入れられるわけではありません。神のひとり子であるイエス・キリストを信じる信仰によらなければ、誰

も入ることができません。アブラハムは神の救いを信じたので、入ることができた。

3) やがての日を待ち望みながら

ここで、すべてが明らかになります。「御国を求めなさい。そうすれば、これらのものはそれに加えて与えられます。」イエス・キリストを信じなさい。そうすれば、あなたは本当のパンを手に入れることになるのだから、もはやほかの所を探す必要はない。天の御国においてはいのちのことを心配する必要はなくなる。そういう意味になります。

でもそれはやがての日のことになります。今、私たちはアブラハムのように天の御国を仰ぎ見ながら歩んでいる途上にあります。だから、日ごとの糧を与えてくださるのよう主に祈りながら、私たちは与えられた場所で糧を得るのです。いのちのことで心配するな、と言われたのは、必要以上に「私のもの」として倉にため込んでいく。そのような生き方を戒めていることで、病院に行くなど言っているではありません。

御国を求めているも、苦勞がなくなるわけではありません。イエス・キリストが歩まれた道は苦しみに満ちたものでした。私たちはその御あとをたどっていきます。他の道ではありません。なぜでしょう。その先に、私たちが求めている御国があるからです。

十字架を通して御国を備え、私たちに必ず与える約束してくださる主の御名をあがめたいと思います。